



次 目

修養の大要(完結)……………	本多日生
立正安國論講話(第二講續)……………	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(廿八)……………	河合陟明
記事	
○本部圖報	
○福島教信	
○入帳報告	

號月一十 年八十四第

統

第一號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第二號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第四號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第五號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第六號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第七號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第八號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第九號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第十號 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號

第五百八十三號

第四十八年 十月號

第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號
 第三十三年十二月二十四日 第三號郵政特准掛號

第五百八十四號

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間ニ佛祖正風ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本國ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ露紗會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一團トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル活動

ヲ有スル名譽アル正定業ナルガ創立者本多日生上人運化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正風ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵遠 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

憲ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ遵スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ眞實ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正風ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ培榮シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭右教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ寄附セラル方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

修養の大要 (完結)

本多日生

それくらゐ人間の精神力は不思議なもので、例へば内臓の病氣でなくとも、指の先に腫物が出来た、同じやうなのが二本の指に出来て居るといふやうな時に、醫者がこれを見て、「甲の指の腫物は少し性質が悪い、これはちよつと面倒です、併し乙の指に出来て居る腫物は大した事はない、直ぐ癒ります」斯う假に言つたとする。それから薬を付けて繃帯を捲いて呉れる。翌日行つたところが、「昨日言つた通り甲の指は性質が悪い、御覽なさい、少々變です、乙の方は大變良くなりました」斯ういふ醫者の言葉だけでやつて一週間ぐらゐ経つと、乙の腫物はスツカリ癒つてしまつても、甲の方は少しも癒らない。それは何故かといふと、同じ腫物であるけれども、精神作用が加はつて居るのである。それはおかしい位のものである。精神の關係は無からうと思はれるやうな腫物でもさうである。況や眼に見えない内臓の病氣に關しては非常に精神の影響がある。

これは私自身に最近経験した事であるが、私はあまり醫者に診て貰はない方であるが、この間その石田といふ醫者が私の體を診て呉れた。それは三月の二十日に非常に雪が降つて、體の具合が少し悪いところを東京の日曜講演を済まして、その晩道敷に出發した。神戸に着くと少し熱がありました、けれども豫定の講演會は次から次ときまつて居るので少しも休むことは出来ない、神戸から大阪、京都、名古屋と来て、名古屋で二日ばかり続けて日に三四回の講演を繼續して居つた。ところが二日目の夜の演説が終ると心臓狭窄といふ病を起して、心臓がねちけてしまつて非常に痛い、私は始めてそんな病氣をしたが非常に苦しいものである。併しあまり騒いでも人が心配するだらう、演説も

済んだから寝さへすれば宜いと思つて、黙つて床に入つたが、横になることも出来ない、坐ることも出来ない、非常に痛い、三時頃まで苦しんで漸く少し痛みがひいたから眠つた。翌朝知らぬ顔をして居つたけれども、まア少しは言うて置く方が宜からうと思つて、その事を話したところが、私の弟が非常に心配して、直に電話を掛けて醫者を呼んだ。来て診たところが、「大したことはありませんね、疲れて居るところに頭を使ひ、氣管を使つたから心臓が狭窄を起したので、心臓自身が悪いのではありませぬから、疲れを取りさへすれば心配はありませぬ。まア成べく氣にしない方が宜しい」といふことであつた。併し私は最初から何でもないと思つて居る。診て貰はなくても宜いと言つたのだけれども、そんなことは無い。心臓の病氣を打ちやつて置くことにはないとやつて醫者を呼んでしまつた。もと／＼私にはそれほど心配はして居なかつた。果して心臓の病氣ではない、疲れて居るから休養さへすれば宜い、疲勞の爲に起つたといふことで、「それはさうだらう」といふやうな譯で、直に遂つて、それ以來何等の異常も無いのでありますが私は常にさういふ風に物を考へて居る。これなどもその時に大變だ、大變だと考へたならば、今頃まだ病氣で寝て居つたかも知れない、體を粗末にするといふことはいかぬけれども、自分の信念と健康の維持方法に就ては、餘程勇氣を以て身體に當る方が宜いと思ふのである。

今日は微菌といふものが發見されて、或は瘰癧菌であるとか、ペスト菌であるとか、結核菌といふやうなものは一パイ居る譯である。近來の進歩した醫學に於ては、さういふ微菌が口から入らないで、皮膚を侵すといふことを學者が主張して、その議論に對抗することが出来ないやうになつて居る。さうすると人間は何時何處で微菌に侵されるかわからない、そんな事をビク／＼して居つたならば、何處へも出られない、家の中に引込んで、一切社會と交通を断たなければならぬこととなる。能く新聞などにも出て居る、風呂屋の湯の中にくら微菌が居つたとか、電車の吊車を調べて見たらどの位微菌が附いて居つたとかいふことが出て居る。それはあの通りに違ひない、けれどもそれに對抗するには、今申す精神力と身體の健康を以て當れば宜いのである。それをビク／＼して逃げ廻つた日には、人間と

してこの世に生存することは出来ない。その以上に微菌に侵されて死ぬといふことは、これは運命として覺悟をするより仕方がないといふ風に、精神を落着けて、さうして力強くやつて行かなければならぬ。

その代りそれが爲には不養生をしないやうにして置かなければならぬ。一方で不養生をして居つて空元氣をいくら出しても、それは矛盾であるから、養生といふことは大事である。その養生はやはり食物が第一、それから睡眠、さうして精神の調節といふことが肝要だらうと思ふ。食物は成べく能く考へて、あまり多量に食ひ過ぎたり、或は又婦人の人はどちらかといふと、小食で、食へたくないと言つて食へないで居るやうな事がありませんが、それは宜くない、科學的研究から言へば、どうしても人間は或る程度のもを食はなければ、栄養不足を來して生きられない。今日も食へたくないから一膳しか食へない、明日も氣持が悪いから半膳しか食へないといふやうなことは、婦人に取つては、非常に悪いことである。或る程度の栄養を吸収しないと云ふことは、自分の健康を損ねることであるといふことを考へなければならぬ。人間一人前の栄養素は、普通の婦人に就て調べたならば、キツト缺けて居るでせう。この間私は大阪の糧秣廠へ行つて講演をしたところが、廠長が、軍人に食はず堅パンを製造して居るのを持つて來て呉れた。それが八つが一食分ださうであります、あまり大きなものではない。併しそれは大きなパンを壓搾して堅くしてあるので、あの堅パン八つといふものは並々青年の男子でも食ひ切れない位である。六枚ぐらゐ食つたならば、それで水を飲んだら腹が一パイになつてしまふ。大抵の女の人は、あの堅パンならば一つ半が精々二つぐらゐしか食へないだらうと思ふ。どうも普通の婦人の栄養といふことに就ては缺けて居るのではないかと思はれる。私は専門ではないからあまり注意した事も無いけれども、軍隊の食糧の話から考へて見て、どうも日本婦人の食糧は栄養分が缺けては居ないかと考へたのであります。

さういふことは今後の女性に能く研究しなければならぬ。自分の身體を保持して行くだけの栄養をもらないなどといふことは、實に暗愚なことである。その爲に體が弱つてグニャ／＼してしまふといふやうなことではないかぬ。どうし

ても體は大事にしなければならぬ。お釋迦様は言はれて居りますが、菩薩は身を護らなければならぬ。何故かと言へば目的を有つて居るから。どうしても向ふの岸に渡つてその目的を達しようとするが爲には、向ふの岸に渡るだけの體力を具へなければならぬ。川の真中で船が壊れてしまつたならば目的を果すことは出来ない。人間が或る志を立て理想を描いて、それを實現しようとするには、先づ健康を保持して行かなかつたならば駄目であると言はれて居る。洵に尤も至極なことでありませう。婦人は婦人自身に取つても大切でありますが、殊に子孫を増殖して行く大任務を有つて居るのであるから、やはり婦人の健康はその子供に影響して行く、病弱な子供を産んだならば、その者が確かりした働きが出来ないのであるから、健康は婦人に取つて道徳上非常に大事なことになるのであります。

先づこの二つが土臺になると思ふ。疲れない精神と壯健な身體、これがなければ何事も成立たない譯である。精神は疲れて居る、體は弱いといふことであつたならば、施すべき途は無いのであるから、一切の人間が修養を積むとか志を立てるとかいふことに就ては、先づ疲れない精神と、強健な身體とを準備して置くといふことに出發しなければならぬと思ふ。

さうすると第三にそこに現れて来るものが所謂信念であつて、立派な信仰を打立てなければならぬ、それは無論宗教的のものである。宗教的といふのは、自分自身のことには就ては、生命のことから考へて、本當の我は死んで行くものではなく、この心、この靈魂は始め無く、終り無く續いて行くもので、今の心の働きは十分でないけれども、この心の中には如何なる尊いものも有つて居る、佛様の御智慧御慈悲と同じやうな精神の作用も有つて居る。往いては佛になる要素がちやんと揃うて居る自分である。今は粗末だけれども、心の奥は絶対無上の尊さを有つて居る。それが我である。そのみがか一番の頼りになる。人間として一番嬉しいのは、自分を考へて佛性があるといふことである。それ以外の事は外からくつ附けたもので、假に合はせたものは必ず離れる。會者定離（ウチカヒトノトキニ）と言つて、會ひし者は必ず離れる、附燒（ツケカ）又のものは必ず離れるが、自分の心、自分の靈魂、それに絶対の價値があるといふこと、これが本當の歡喜

であるといふことが、宗教の精神の一つである。嫌やな事が現れた時にはそれを考へるのである。肉體は燒き殺されてしまふが、靈魂といふものがあつて、それには無限の光がある。これは自分のもので、決して人に奪はれるものではない、火も燒く能はず、水も漂はす能はず、この尊きもの我にありと考へて見れば、一切の世間の事は假和合で、假に親子となり、夫婦となり、兄弟となりしたけれども、これは皆な別離してしまはなければならぬ。最後残るものは自己の靈魂のみである。そこに無限の光がある、これは誰も奪ふことが出来ないといふところから、宗教的の信仰といふものは、他のものを以て壊されるやうな薄弱なものではない。體は壊されても、その靈魂は残るのである。

その尊い自己の靈魂が覺醒して、この大宇宙を眺めた時に、自分の親といふか、救ひ主といふか、一番尊い方があることを發見するのである、それが佛敎の敎にあつては佛様である。その絶対無上の佛が我を救ふべく天上に御生れになつてお釋迦様として一代の敎を立てられた。そのお釋迦様は涅槃なされたけれども、本佛としては今も常住に我等を護つて下されて居るといふことは、信仰の眼を開けばあり／＼と尊き佛は我が前にお在でなされて居る。その佛の力に依れば、自分が如何に足らないものでも、自分の徳が足らなくとも、力が足らなくとも、本佛の絶対の力を加へて、本佛は廣大なる徳を有ち力を有つてお在でになるのであるから、足らない所は補うて我を救ひ上げて下される。か弱き力の者でも救ひ上げる人の力が強ければ救はれるやうに、佛の力は絶対である。私の信念の手さへ伸せば、直に救ひ上げて貰へるものである。さういふ結構な佛様と自分の本當の靈魂との關係が結付いて、信念を定めて居るのである。そこに人生の絶ての苦しみ、絶ての事柄よりも尊き歡喜を有つて居る。

これを金剛の歡喜と申すのでありますが、金剛は何ものにも壊されない。この最大最強の歡喜を以て人生に立つのである。それは夫婦の別れ、親子の別れ、その他人生の有爲轉變の變化といふものは實に恐しい、銀行に金を預けて安心して居つたものが、銀行が潰れて一擧にして數千萬の財産を失つたといふやうなことに出席へば、一時は非常に驚愕するけれども、併しさういふことの悲しみよりも、自分の信仰に生きて居るといふことが最高の歡喜であると

いふことに依つて、人生のあらゆる悲しみを打消す力を有つのである。

その歡喜の中から進んで、どうしても信念の力に生きて行く以上に於ては、信は直に願行といふものを喚起して來るのである。一つの志を立て、それを實現せんとする、小さければ小さいなりに願行といふものが起つて來る。これだけの事をしよう、今まではうつかり人生を暮したけれども、今後二十年或は三十年の人生とするならば、その中には斯ういふ理想を描いて、それを實現しようとする。家庭で言ふならば、家庭に就て斯ういふ風にして行かう、自身に就て言ふならば、斯ういふ事をして行かうといふやうになつて來るのでありますが、その願行は先づどういふ方面に主に現れて來るかと言へば、第一にはやはり親切の心として、人の爲に盡さうとする精神に現れて來るのであつて、それは親子、夫婦、兄弟、その他社會人の如何なる人に對しても、だん／＼考が廣くなつて來れば一切の生きとし生けるものに親切を盡して行かう。さうしてそれが他に親切を盡しつゝ自ら幸福を感じるのである。妻であれば夫に親切を盡しつゝそこに幸福を感じる『妻が斯ういふ事をして上げたから、これだけの報ひを呉れ』といふ、返禮を求め心ではない、『あなたに斯ういふ御馳走をして上げるから妾に着物を買つて下さい』といふのではなくして、自分の心を盡した御馳走を夫が美味いと嘗つて食べて呉れば、その中に自分が歡喜を俱にするといふ精神である。世の中の人に對しても、憐れなる人間が一人でも恵まれたといふことになつて、その幸福なる生活を見ればそれを自分の歡喜とする。ちやうど親子の間に於てはそれが美しく行はれて居るのである。親は自分の子供が成人をして立派な人間になつて行けば、それを横から見ても喜んで居る。子供が何か品物を持つて禮に來て呉れたといふことが歡喜ではなくして、子供自身の成長、發達、幸福、それを親が喜ぶ、あゝいふ精神が宗教的の願行から現れて來なければならぬ。この親の心は即ち神の心、佛の心とも言はれるので、大抵の親は子供に對して、『あれ程世話をしてやつたのに禮を言はぬといふのは怪からぬ』などと言ふものではない。親を有難く思へといふことはそれは或る場合口では言ふけれども、口に言はなくても、子供がちやんと立派にやつて居れば、それを横から見ても楽しみとして居る。漸く學校を

卒業して世の中に出て月給を取るやうになつた。五十圓でも七十圓でも月給が取れるやうになつたと言へば、それを見て親は子供の成功を喜び樂しみとして居るのである。この心は實に尊い親切の現れであります。あゝいふ意味合がより多く夫婦の間に、兄弟の間に、社會人の間にも働いて行くやうな願行といふものを打立て、行かなければならない。

さうすると、それは宗教の教を弘めて行く事柄もその通りになつて行くので、自分ばかり信仰の歡喜を得たと嘗つて満足して居らないで、『あの人は親しい友だけれども信念といふことを知らない。その爲に餘程苦しみが多いやうだこの信念の歡喜を分けて與へよう』といふことになつて行けば、それがやはり非常な親切となつて現れて行くのであります。この願行が修養の力の根本になるのである。志無くして修養が出来るものではない。願行があつて始めて力が現れて來る。何の理想も無く、目的も無くして、たゞ力強く生きようと言つたところが生きられるものではない、どうしてもこれだけの事はしなければならぬといふ所にそこに力が出て來るのである。人間は何事に依らず、自分が責任を帯びてそれを果さうといふ願行に生きる時に偉い力が現れて來る。その力の中に又幸福を感じるのであつて、それを果した歡喜は、非常なものである。

前からお話した精神を無駄遣ひせぬやうにと、身體を壯健にして置けとかいふことは、これは基礎になる所謂地形であつて、その上に打建てられる建築は即ち信念願行である。

そこに自警といつて、出來上つた家に塵埃が附かないやうに、庭に草の生えないやうに、掃除をしたり、草を除つて行くやうなことが必要になつて來る。即ち修養に就て言へば、精神の無駄遣ひをして居りはしないか、身體の不養生をしては居ないか、信念が曇りはしないか、願行が衰へはしないかといふことを自ら省るのである。さうして絶えず反省をして、朝顔を洗つた時にも、やはり精神の健康と身體の健康に注意し、さうして信念願行を忘れぬやうに、常に心懸けることが必要である。

そこに日々の勤行といふことが起るのである。勤行は唯お経を読むばかりが能ではない。その考を毎朝繰返して行くので、家に譬へたならば、塵埃は無いやうであつても、毎朝座敷の中を掃き、拭掃除をし、庭を掃くといふやうな意味のことが勤行である。勤行はちやんと出来上つて居るものを掃除をして綺麗にして行くのである。床の上にも塵の無いやうに、花を活けてちやんと整へるといふやうなものである。日頃考へられて居る精神を整頓するが爲に、顔を洗つてちやんと佛壇の前に坐つて勤行するのである。それが佛壇の前に坐つてもぼんやりして、たゞ口先だけで爾時世尊從三昧……本末究竟等チーン、下女が申譯に掃除をするやうに、たゞはたきの音ばかりたゞ言はして、少しも綺麗にならないといふやうな、さういふやり方では勤行の効果は無い。ちやんと落着いて、今申す精神を養ひ、健康を保持し、信念を立て、願行を實現して行く爲に努力することを、繰返し繰返し自分のたましひに鞭うつて行くといふことでなければならぬ。聖賢の教では、少くとも日に三たび我が身を省みよといふことを申して居るが、佛教の方でもやはり三たびやることになつて居る。それは朝と晝と晩とであるが、晝御飯を食べた時にさういふ事を考へるといふことは、日本では殆どやらないやうであるが、佛の教は晝もやることになつて居る。聖人の教もさうである。晝飯を食つて御飯が終つてお茶を飲んだその時に、やはり精神にその事を考へて修養を怠らぬやうにした方がいいものである。

先づ以上申した養神、健康、信念、願行、自警といふ五つの事を守つて行けば、修養の通則が行はれると思ふ。法華經の勸發品に

若し善男子善女人四法を成就せば、如來の滅後に於て當に是の法華經を得べし、一には諸佛に護念せらるゝことを得、二には諸の徳本を植え、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發すなり。

とあつて、佛に護つて貰ふことと、徳を積むことと、力を協せてその徳を實行して行くことと、さうして慈悲の心を失はぬやうにするといふことが力強く説かれて居る。それが信仰であり、それが修養であつて、決して佛教の信仰は

貧弱なるお有難主義のものではないといふことが、法華經に依つても能くわかる譯である。さうして一遍にはなか／＼さう思ふ通りに行かぬけれども、信仰といふものはさういふ譯のものだと心得て置けば、心得の無い者に優つた色合がだん／＼現れて来る。人間は一擧にしてさう偉い者には成れぬけれども、心懸けて行けば自然々々にさういふ色合が増して来るのであるから、どうぞ左様な意味に於て、信仰と修養の密接なる關係をお考へになつて、修養の側から、この會のやうな清い集りを益々進めて行きたいと思ふのであります。

聖人は強健にして病なき人の如く、賢人は生を攝め病を慎む人の如く、常人は虚羸にして病多き人の如し。

生物は皆死を畏る、人は其靈なり、當に死を畏る中より死を畏れざるの理を摸出すべし。吾れ思ふ、我が身は天物なり、死生の權天に在り、當に順に之を受くべし、我が生まるるや自然にして而して生る、生る時未だ嘗て喜を知らず。則ち我が死するや應に亦自然にして而して死し、死する時未だ嘗て悲みを知らざるべし。天之を生じ而して天之を死す、一に天に聽かん而已。吾れ何んぞ畏れん。吾が性は則ち天なり、靈發は則ち天を蔽するの室なり、精氣の物となるや天此の室に寓し、靈魂の變を爲すや天此の室を離る、死の後は即ち生の前、生の前は即ち死の後、而して吾が性の性たる所以の者、恒に死生の外に在り、吾れ何んぞ畏れん。夫れ晝夜は一理、幽明は一理、始に原づき終に反り、死生の理を知る、何んぞ其れ易簡にして而して明白なるや。吾人當に此の理を以て自省すべし。

——南洲手抄言志錄——

立正安國論講話

(第二講稿)

小林 一郎

一〇

日蓮上人が北條氏に對して立正安國論を提出されたといふことは、この安國論だけで見ると法華經を勧めるといふ單純なことのやうに見えるけれども、能く考へれば北條氏に對して根本的の反省を促したことであります。本當に北條氏その他が法華經を信じたならば、今までの政治の執り方をスツカリ變へなければならぬ。そこは能く考へなければいかぬ。

その北條氏の間違ひを指摘するのにどういふ態度を採つた人が居たかと言へば、日蓮上人以外には梶尾の明慧といふ人が居る。この人はマアなかなか徳もあり學者でもあり徳望もある立派な人でありましたが、この梶尾の明慧上人といふ人は北條義時の息子の泰時に非常に歸依されて居た。さうして泰時が屢々梶尾に行つて明慧上人の教を受けて居る。それで或時泰時が梶尾に行つたところが、明慧上人が泰時に向つて「一度はあなたに詳しく聞きたいと思つて居つたが、あなたはどういふ料簡で親の義時に命ぜられて兵を擧げて京都に攻め上るやうなこと

をしたか。あなたは非常に情の深い人で人物として立派な人と思つて居たのにあなたにも不似合なことと思ふ」斯う言つた。そこで泰時も非常に自分の心に咎めて居ることだから涙を流して「マアあの時の行き掛りとしてはああいふ風になつたけれども、自分はそれから後も始終これと思ひ出して済まない済まないと思つて居る。この罪は何とかして償はなければならぬといふことは自分も考へて居る」といふことを申したのであります。さうすると梶尾の明慧上人の言ふには「それならば良い政治をしたら宜いだらう、人民を憐んで仁政を施してこの罪を償ふより外はないだらう」といふことを忠告をしたといふことが、明慧上人の傳記に見えて居るのであります。それは成程さうかも知れないが、併しながら徹底をしない議論である。ただ仁政をしただけでは罪は償へない筈である。本當に悪いと思つたら陪臣が政治を執るといふことを根本から止めなければならぬ筈でありますから、これはホンの妥協的の考へ方としか言へない譯であります。

す。その他に北條氏の爲すことについてさう根本的の批評をした人は當時の宗教界には見えないやうであります。日蓮上人はさういふことについて根本的の批評をなすつて、これは又何かの時にモウ少し詳しく申しますが日本の謀叛人を數へる時に、源頼朝と北條義時が謀叛人だといふことを言つて居られる。第一第二とだんだん數へて來て頼朝・義時と斯う言はれて居る。北條全盛の時に而も鎌倉幕府が榮えて居る時に、頼朝と義時が謀叛人だといふことをハツキリ言はれたといふことは、殆ど當時の宗教界には類例が無い。そこで序でだから申しますが、なぜ頼朝を謀叛人にしたのだからか、これは一種の問題であります。頼朝といふ人は天下を平らかにするのに随分功があつた人で頼朝が出なかつたら天下は平らかにならなかつたのでありますから、その點から言へば立派な人でもあります。日蓮上人も或る場合には頼朝を褒めて居らつしやいます。この人が出たから長い間の源平の争も片付いて人民がその楯に安んずることが出来たのは結構だといふことは言つて居られる。けれども、一體鎌倉に幕府を開くといふことは國に中心が二つ出来ることである。これはいけない。成程以前にも藤原氏の一門とか或は平清盛とか或はズツと古く言へば蘇我氏を始め随分我が儘をしたことがあるけれども、それらのものは天

子様の居らつしやる都で自分の專横を働いた。けれども形の上から言へば國の中心はチャンと決まつて居る。都が大和に在る時は大和、京都に在る時は京都で我が儘をして居る。天皇を上に乗せて天皇をお助け申すといふ形で我が儘をやつたけれども、體面といふものはチャンと保たれて居る。國の中心はチャンと決まつて居る。外國から見れば藤原氏とか蘇我氏がどんな我が儘をしようが、やはり天皇の下に屬して天皇をお助け申すといふ形でやつて居る。ところが、頼朝になつて初めて都を離れて鎌倉に幕府を開いて一國の中心が二つ出来てしまつた。殊に義経が奥州に逃げて後は總追捕使として日本全國を我が手に收めて守護・地頭を置いて國司やなにかの間に割り込ませて、鎌倉の勢力といふものを全國にズツと擴げてしまつたのでありますから、これは今までに例のないことであります。成程國を平らかに治めたといふことは功績であつたらうけれども、天皇の都以外に日本の國の政治の中心をモウ一つ造つたといふことは、これは日本の國體としては許してならぬことである。それだから北條も出たのであります。若し頼朝が鎌倉に幕府を開かなかつたならば北條が陪臣として我が儘をするナンといふことはありはしない、だから北條を咎めるならばモウ一段邁つて鎌倉といふ別のところを政治の中心を造

悲まざるの族、敢て一人も無し。

そこで問答の第一段のところは「旅客來つて嘆いて曰く」旅の人が日蓮上人のところへ來て嘆いて言ふには、どうもこの頃は「近年より近日に至るまで、天變地妖」といふものが非常にある。彗星が出たとか、日月の運行が狂ふとか、或は飢饉があるとか、厄病が流行するとかいふやうなことが週く天下に滿ちてしまつて、さうしてモウこの地上に殆ど災難といふ災難は皆透つて居る有様である。さうして牛馬も巷に斃れるし、又人間も死んで人間の死骸もその邊に一杯散らばつて居るやうな有様である。「死を招く」ところの者が随分多い。「大半に超え」といふのは少し言ひ過ぎて居りますけれども、マア澤山ある。それで又それを悲まない者は殆ど無いからである。それだから何とかこれはさういふ災難を救はうといふことでさまざま方法をやるけれども、その災難が少しも除かれないといふことでいろいろな信心をして、神様を祈つたり佛様を祈つたりして災難を救ふことを努めて居る。その有様をここに數へ上げてあるのであります。

然る間、或は利劍即是の文を専らとして、西

つた頼朝の責任を訊すといふことが徹底的な考へ方であります。だから頼朝の功績は功績として認めるけれども、日本の國といふ上から考へてやはりこれは謀叛人だ、斯う断定されたのであります。これは餘程シツカリした根柢のある見方と言へるのであります。さういふやうな譯で日蓮上人の議論といふものは、何時でも徹底的な議論でありまして、宗教のことばかりでなく世の中の事でも非常に根柢から物を考へるといふ考へ方をして居られるやうであります。これもその一つの例として申上げたのであります。

さういふやうな譯でありますから、この立正安國論を讀んで見ても別に法華經の詳しい説明とか何とかいふやうなものはありませんけれども、一體法華經を信する人の立場がどんな立場か、物事をどういふ角度から見るといふ態度が實に能く分るのであります。さういふ意味に於てこの立正安國論といふものが大變に重要なものになつて居る譯であります。

旅客來つて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天變地妖、飢饉疫癘、遍く天下に滿ち廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半に超え、之を

土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて、東方如來の經を誦し、或は病則消滅不老不死の詞を仰いで、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて、百座百講の儀を調へ、或は祕密眞言の教に因りて、五瓶の水を澆ぎ、或は坐禪入定の儀を全うして、空觀の月を澄し、若くは七鬼神の號を書して、千門に押し、若くは五大力の形を圖して、萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して、四角四界の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀みて、國主國宰の徳政を行ふ。

一番初めの「利劍即是の文を専らとして」といふのは念佛の方の阿彌陀様を頼むことであります。これは唐の善導といふ人の言葉に、利劍は即ち是れ彌陀の號なり。一聲稱念すれば罪皆除かる。

といふ言葉がある。それに基いて居る。劍で物を斬り拂ふやうに阿彌陀様の御利益といふものは實に大きい。だから縦ひ一聲でも南無阿彌陀佛と阿彌陀様の名を唱へれば罪皆消えるのだ、斯ういふ言葉がある。善導といふ人は支那の唐の時代に念佛が非常に盛になりました。その念佛を盛にするに於て殊に功勞の多かつた人でありまして、日本でも法然上人やなにかが始終この善導といふ人の言葉を引用して居ります。その善導の言葉に今申したやうな言葉がある。それで阿彌陀様を念じさへすれば有らゆる罪が皆除かれるのだから、世の中の災難も無くなるといふのであります。そこでその善導の謂ふ「利劍即是」といふこの言葉を唱へて、さうして世の中の災難を救はうといふことを随分やつて居るといふことであります。

無論、日本では奈良朝・平安朝以來佛教の信仰が盛でありますけれども、一體信心をして世の中を善くするといふことは、本當に言へばこの前言つたやうに立正安國でなければならぬ。正しい教を信じて人間の心が建ち直らなければ世の中は善くならない筈であります。それを人間の心が元の空阿彌で居て、佛様に頼んで何とか病氣を治して下さいとか、災難を除いて下さいとか言つても、それは無茶な話であります。それでは信心ではなく

註文のやうになつてしまふ。人間が建ち直つてこそ世の中が善くなる。なぜ信心をするか、心を建直す爲に信心をするのである。人間の心には佛性といふ佛と相通するところの貴い性質があるのだから、その貴い性質を育てて大きくする爲の信心でなければならぬので、自分が迷ひだらけでありながら、神や佛を頼んで災難を除いて貰ふとか、飢饉であるのを米の出来るやうにして貰ふとかいふやうなことは、それは極く幼稚な愚かな考であります。だから、さうは言はぬけれどもここに語りそれが言つてあるのであります。いろいろやつて見て駄目だと言ふが、それは駄目の筈である。人間が間違つて居ては仕様がな。幾ら阿彌陀様を頼まうがお釋迦様を頼まうが何しようが、それでは仕様がなではないか。斯ういふ趣意であります。これは實に尤もなことであります。

そこで「利劍即是」といふやうな言葉を唱へて、さうして阿彌陀様に頼んで世の中の飢饉や洪水を避けて貰はうといふやうなことは一向効目はないのだ。「西土教主の名」といふのは、阿彌陀様であります。西方極樂淨土を掌つて居るところの阿彌陀様をお頼み申す、斯ういふことをやつて居るのがあるけれども、それは効目がない。或は「衆病悉除の願」を懸けて居る者もある。これは藥師様の願である。藥師如來といふ佛様が、自分を信じ

て自分を頼む者は病を除くやうに護つてやるといふことは、藥師經の中に、

衆病悉く除かれ身心安樂なり。

とあるが、これに依つたのであります。だから藥師様を信するといふことで世の中の厄病などはなくなる。これはやはり一つの災難除けであります。さうして「東方如來」といふのは藥師様、藥師様といふのは東方の淨瑠璃世界を掌るところの佛である。

それから「或は病則消滅不老不死の詞」といふのは法華經の藥王品の中にある言葉で、その「病則消滅不老不死の詞」を頼つて、さうして「法華經眞實の妙文」を崇める者がある。法華經といふものはお釋迦様の魂を打ち込んで説かれたお経だから、法華經を信するならば宜いけれども、法華經を讀んで、法華經に病が除かれるとあるからただ讀みさへすれば病氣が治るのでといふことはそれは信するといふ事ではないのだから、縱ひ法華經を讀んでも語らぬ。斯ういふことになるのであります。法華經を讀むならば、法華經の精神を學ばなければならぬ、法華經の精神を學ぶならば、一切の煩惱を除いて自分の心の佛性を磨いて、佛と同じやうな大慈悲の心持を具へるやうにならなければ法華經を讀んだとは言へない。それを放つて置いて、ただ法華經に病が除かれるとあるか

ら、それを讀みさへすれば病氣が治るといふことで法華經を讀むといふことはいけな。ただ法華經の言葉の一部分だけ取つていい加減に使つて居るのでありますから、法華經を讀んでも法華經を信じたとは言へない。それをここで言つて居るのであります。「病即消滅不老不

死」といふ詞があるからと言つて、その詞を頼りにして法華經を讀んで、さうして自分の本當の信心もしいで法華經を讀んだから病氣がなくなるだらうといふやうなことを考へる者がある。これも洵に愚かなことである。

(次續)

記事

本部 團報

大體奉獻日 十月八日の此記念日實踐事項は、軍人援護精神の昂揚と、戦力増強などが叫ばれてゐることにより、本部でも早朝六時通から御餐前に於て國聯會と國民儀禮の後、總務理事起つて、昨今各方面に爲すべき事は彌々多く人手は漸次薄らいで参つたが、而かも互の本心がバツチリと覺醒して居れば仕事は却つて能率のあがるものである。されば産業方面でも、食糧増産でもかかる自覺せる精神に基いて活躍する時、歡悅の中に幾層以上の成績が得られると二三の實例を示して、今や男女老幼を問はず悉くが戰士であるから欣然として職責配置に就くやうに力説された。

お會式 弘安五年十月十三日は、日蓮大聖人の池上に於て入寂を示された日であり、大正十一年十月十三日は立正大師の設教

御宣下の意義深い日である。「日蓮はいづれの宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず」と仰せられてゐる通り、聖人は一宗一派の爲に奮闘されたのではない、壽量本佛の正使として時に應じて出現し立正安國、理想國土實現の爲、迷衆の首を闢くべく口に折伏を行じ、身に講受を示されたと拜する。今や人々には最高の教化を與へて永い歌詠から覺醒せしめることが根本と思はれる時、一同は立正精神を體し、其の御遺志の機分でも光顯すること、日蓮の弟子檀那と云はるべきであるまいか。育ていふ、吾人は一宗一派の爲に身命財を捧げたり、貴重用の紙を費したり、日常を過すものではない、偏へに立正大師の御心を御心として四弘誓願に燃えてゐるのである。無信謗法の徒の窺ひ知ることの出来ない境地に安住し得るは全く信心のたまものである。聖人が胎陀羅の子であるとか、畜身に似たりとかであつても、他面には梵天帝釋に三界四天を譲られて天人に拘がるよりもヨリ以上の幸福者、世界第一の富める者と仰せられてゐるのは實に信心のたまものであるまいか。此の時局に臨んで

致名利の念に執はれたり、顧慮の態度を示すものの如きは毫に因果を辨へず、起人の實在を信ぜないからで、最後の斷末魔に到つて後悔するも及ばない、大に法鼓を撃たねばならぬ。

十日の日曜日午後二時より和賀、山口、小西等の諸師を中心に報恩の妙味を供へて後、磯部、山口、和賀の諸氏により法話や紙芝居を以て参詣の各位に多大の感銘を與へ五時前に閉會。

其他 毎月曜日朝の信行會は益々好評で、信と解にいそしみ、盡忠報國の道に力附けられてゐる。醫士塚の聖真講堂は暫らく休會。

福島 教信

高商例會 十月十六日午後三時磯部先生を邀え於如春莊開會、修法後、立正大師の主要教風を約一時間懇説され終つて有益な質疑應答に時の過ぐるを忘れた。

町の會 同晚七時より大町の中村樓方にて例會、法華部に就て有難い特話を話され、時局柄益々強盛に信仰せねばならないと痛感した。閉會後も二三の質問もありて名残り惜しく十時頃お別れした。

哀 悼

本國理事柴田武治氏夫人鈴子善女人は先般來御病氣再加重の處藥石効なく遂に去る九月二十五日四十七歳を一期として長逝された。謹て御冥福を祈る。南無妙法蓮華經

團費誌料維持費及寄附金領收(自九月二十一日至十月二十一日)

一金 參 圓也	千葉縣 花島喜三郎殿
一金 五 拾 圓也	北支 種村五郎殿
一金 參 圓也	東京 宇野博願殿
一金貳圓 貳拾錢也	横濱 權田藤三郎殿
一金貳圓 五拾錢也	川口 尾形多喜男殿
一金貳圓 五拾錢也	濱濱 杉本光衛殿
一金貳圓 貳拾錢也	福島縣 尾形信一殿
一金 五 拾 圓也	東京 榮田武治殿
一金 五 圓也	山梨縣 原田幸八殿
一金貳圓 五拾錢也	愛知縣 藤田清太郎殿
一金 參 圓也	東京 鈴木祐五郎殿
一金 拾 圓也	同 山口智光殿
一金 拾 圓也	同 山田英二殿
一金貳圓 貳拾錢也	青島 山形耕作殿
一金貳圓 貳拾錢也	同 泉 健 美殿
一金 五 拾 圓也	東京 下妻有良殿
一金 五 圓也	基隆 深野増壽殿
一金拾貳圓 五拾錢也	東京 篠崎又兵衛殿
一金 五 圓也	南海 夕田正太郎殿
右雜行入帳仕候也 (以是領收證代用)	

財團法人統一團會計

本佛實在の宗教哲學 (廿八)

河 合 陟 明

十八、個佛の統覺における有始と無始との統一 (承前)

かくして始めて眞に十全なる意味における「永遠の今」「永遠に今」そのものの立場に立ち、予のいはゆる叙智的超時間性を獲得し、そこに於てあるものとして全時間體系を充填する實在の全内容を知らんといふことができるのである。

すなはち佛陀において始めて、然り覺者といふ名に値ひするところの眞の覺者に至つて始めて、如理智・實智を盡すと共に、如量智・權智をも盡し、しかもその就中、時のカテゴリーに約して眞無限にして無窮なる——合掌日受師の如實事觀録にいはゆる、逆推にも無窮にして無始、順推にも無窮にして無始以來なる——絶對法界の無始無終の全實相を、悉く盡して知る・盡して覺るといふことが成し遂げらるるに至り、かくて予のいはゆる眞如法性の三諦中道の先驗的統覺力の經驗的作用完成たる意味を、充實するに至るのである。

ここに於て、再び簡潔に佛身の積聚といふことの意味を規定してみよう。かくの如く、根本無明を斷破するや否や、佛陀は一切の時間空間的制約を脱し、九界衆生の如き陰是積聚、生死重沓を積聚の義となすところの、いはゆる五陰和合の有限的積聚とまた陰者、陰三蓋善法といふ如き反價值的迷妄性の五陰とを破つて、即ち苦集二諦を斷じて、

常樂重沓、即積聚義、慈悲覆護、即陰義

といふ、法身・般若・解脱の三徳、或は常樂我淨の四徳波羅蜜を屬性とするところの、法報應三身を以て佛陀の五陰となすに至るのである。身といふも亦これ積聚の義に名くるのであるが、佛陀に至つて始めて、その陰といひ身といふ積聚の義が、完全なる人格的意味を成就するに至るのであつて、即ち(一)にはまづ、不生不滅の理體いはゆる本有無

作の覺自體としての實在の原理的・本體論的積聚體系を無限に開發し、即ち無限に自覺的限定して、つひにその全内包量を再び高次の現實的完結體系に人格化的積聚したるところの、理法の積聚身となる、否、今や全く理を事としたるところの事體としての積聚たる法身となる。つぎに第二に、従つてまたその原理的全質量のみならず、更にその質量の無限に多様な限定の種々相として、或は法性の濃度の無限に多面的なる測定のニュアンスとして、その理的法性的質量の上に於て成立つ事的十界三千の萬有現象を統覺するところの智的積聚としての報身となる。換言すれば、時の全體系に互つて無始以來展開してゐるところの、即ち無限系列をなして展開してゐるところの、十界無限に多元的な諸人格が、相互限定的にはゆる相互作用として互具し縁起し感應しつづつ、歴史的社會的に、時間空間の形式と本有質量の内容との上に、因果的發展の無限連續體系を現出してゐるところのその全體を、佛陀の絕對智といふ智性の内に蓋覆包攝し、完全認識し、以て予のいはゆる内面的貫通の統覺作用の統一を完成せる、智慧功徳の積聚たる報身となるのである。而して第三には、更にまたこの全法界の衆生に對して、ただに智性の蓋覆のみならず、情意の上よりも慈悲蓋覆し、無限の時空に過ぎ救済活動として、自在に十法界を限定し受用する。それも理具三千としての法性の性徳の十界性三千といふ内面性は固より、その因果的構成によつて客觀的・具體的・現實的果報に任せるところの無限に多元的な個體人格としての事體の十界三千をも、自在に證得しまた受用する。而して法性の内面的性具の限定が即ち事相の外面的現實なる具體的現象として成立つに至るのであるが、かくして理事二面の十法界を自在に受用し限定しそれと感應しそれに應現するといふ、慈悲の積聚としての應身となる。この法報應の三身を以て佛陀の人格的積聚とし、佛陀の蓋覆法界となすのである。この *quid facti* 現實的事實は一言にして統覺の *quid juris* 作用的根據によつて成立つ。佛陀の絕對性の、否一般に人格實在性の、根據をなし根柢を賦與し、それを *begrunden* 基礎づけするものは、實に智性にあり、智性の絕對にあり。宜なる哉、佛陀を覺者といふ、その *quid juris* 作用的根據又その *quid facti* 現實的事實は、實に統覺に存するのである。

ここに於てか個佛の始覺とは、有始開覺の一點に於て、その一點を通じ、その一點に即して、實に無始に延び、無始に滿り、無始を窮め、無始を盡し、無始を完全に包攝することにならねばならぬ。これを「有始に即して無始を顯す」といふのであり、しかもそれは又更にその根據を尋ねるとき、無作本有の覺自體の本體的時間性を盡すことによつて、その上に於て成立ち、その内に於て含まれるところの全時間的無始を極めるのであるから、これを「無作を盡して無始を極める」とも予はいふのである。或はかかる兩頭論的命題を、更に一頭論的に表現するならば、それはただ、「無始を包める無作を盡すことである」といふことができる。而してその盡すとは顯すであり、照すであり、覺るであり、知るであり、見るであり、これと一如し、これと合體して、これを完全に自己に體現することである。無作とは、本有とは、實に自己自身の根柢の本質たり、常恒の本體たり、自己の個性的内面的且つ萬有普遍の一元的絕對根據そのものである。即ちそれは心性であり、覺性であり、佛性であり、十界性であり、法性であり、法界性であり、即ち更に換言すれば主體的・實存的なる己心の内奥即唯心法界として宇宙的絕對理性たる、一心真如そのものである。

かくして實在の根本性たる時間的無始を認識し得るその統覺作用の *quid juris* 根據問題は、更に一層深い意味に於て最後の否最初の根本性たる超時間的無作に存すること、即ち一心真如の不變にしてまた普遍なる法性の覺自體といふ統覺的先驗原理に存することを知らねばならぬ。

由來自覺といふことは、予が曾て述べた如く、本を今にすることに即して今を本にする、即ち發展に即し發展の形式に於て還元してゆく所、せしめてゆく所に、自覺の眞の趣きが見られるのである。換言すれば、限定作用の有作なることに即して、隨つてそこに無作の本有なることを省する所に、自覺が成立つのである。知識は常に現象に即して實在の根柢・本體の直觀に還りゆく所に現はれる。いはゆる特殊を一般に包攝する所に現れる。そこに眞の自覺的知識といふものが成立つのである。これを三諦法性論に於ていへば、一空を萬假に限定することに即して、萬假を一空に包攝することであり、多的無限の限界構成・限界定立あるひは限界認識に即して、しかもその内面的貫通の無限なる限界融通・限界超越すなはち一絕對的普遍根柢の超限界性そのものに住することである。そこに眞の *intuitus* 直感的なる知識が成立するのである。かの遂に別教的立場を脱せざりしカントの物自體と知的直觀等の關係もここに解決せられる。而して天台の藏通別圓四教の發展は、實に現象界より本體界へ、有作界より無作界へ、今有界より本有界への、層々切々たる發展的還元の外ならない。従つてこの方向において拆空より體空へ、但空より圓空へ、偏假より妙假へ、空假より中道へ、但中より不但中へ、すなはち三諦相即・三諦圓融の具徳中へ、しかも亦更に圓融

中道において理圓の法性より事圓の法界へ、理事二面の一念三千へ、まさに即ち一大 Yamunth 理性・一大佛性を發見し佛性を實現し、佛性即ち覺性の自覺的限定を完結せんとしてゆくのである。その最後において、圓教の教理の示すが如き、一切の萬有が體象不二なる實在界の直觀に達するに至つたとき、そこに知識客觀性の發展があり、そこに知識圓融性の終結があるのである。摩訶止觀といひ、一心三觀といひ、十境十乘の觀念觀法といふも、かくの如き實踐的行爲に即する知識具體化への發展即還元方向に外ならない。それは凡て佛性向覺の進程に成立つのである。

有作今有の現象的知識が、その根柢を求め、その根柢を尋ね、その由來を極むべく、コーエンの所謂 Principle des Ursprungs 根源の原理を求めて、本有無作の本體的根源に還る、永遠の今・永遠に今なる根本意識・根本智に還る、眞如・如來藏中實理心なる無作先驗的の理門の本覺に還る。覺自體に還る。アリストテレスの所謂一知識とは物の始源を知ることである」その始源といふ意味には無始と無作との二面、すなはち事と理との二面、すなはち又換言すれば現象の根本と本體の根本との兩面を双照せなければならぬのであるが、しかも無始も無作に包まれる。然り本來包まれてゐるのである。畢竟、知るとは、就中、その知るといふことの絕對完成たる佛陀の大覺とは、實在の根本原理として予が會て明かにしたる如き無作の本有・本覺・本行といふ三面の原理の圓融一如なる本有體系が、有作の今有・自覺・受用體系として開展し、その實修實證的・事的・經驗的意識なるものが、無限なる發展即還元の過程を辿つてつひに自己の根柢を反省し盡し、再びその理的・先驗的意識の本有に還り、無作に還り、高次の無作なる Being of a Dharma 第三次元的「證」性の無作・佛果無作に還り、無作寂靜の永劫なる意識界に還り、所謂識浪情波の動搖を絶したる湛然不動の大海に還り、一心法界の心源に還り、直顯心源の根本に還りゆくことに外ならない。まさしく一色を見、一聲を聞き、一塵を知覺し、一法を思念するとき、直ちにこれ萬古永遠の意識界に還り、宇宙永劫の眞實在界に住することであるのである。吾々の意識現象においても既にこの理は成立つのであるが、佛陀に至つては其がまさに無明を斷破して遍滿法界的なる無限大の鏡面として成立ち鏡面において行はれる。いはゆる無限の時空を包攝したる一大已心の統覺面において、まさしく絕對者の絕對的なる智的直觀として是れが成立つのである。これを智恬情泊凝澁靜、意識識亡心亦寂といひ、永斷三夢安思想念、善滅三思想心意識と稱するのである。大涅槃寂靜界といふのは實にかかる境地を指すのである。(法華の開經たる無量義經の德行品における讚佛偈) 南無妙法蓮華經

本多日生上人著書案内

聖語錄	改定	定價	金貳圓
法華經要義	同	定價	金參圓
日蓮主義心髓	同	定價	金壹圓八拾錢
日蓮主義精要	同	定價	金參圓五拾錢
法華經要品	同	定價	金五拾錢
本尊意識に就て	同	定價	金貳拾錢
法華經の心髓	同	定價	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	定價	金七圓五拾錢

編者諸事匯輯	定價	金貳圓
本多日生上人	同	金拾錢
勤行作法	同	金壹圓
佛敎の心髓	同	金壹圓

河合啓明著
皇道と日蓮主義
定價 金壹圓

東京都小石川區音羽町六ノ十七
財團法人 統一部
香〇二四九京東替振

定價一統	一冊	金貳拾錢	送料壹錢
	半ヶ年	金壹圓貳拾錢	
	一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

昭和十八年十月二十七日印刷納本
昭和十八年十一月一日發行
(第五百八十四號)

東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 統一部 滿事
東京都西各區內藤町一
印刷人 山田英二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

發行所 財團法人 統一部
東京都小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
東京都東九四二〇番
配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九番地

統

一

明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日
明治三十八年十一月二十七日

第五百八十四號

第四十八年十一月號